

■海戦史を漁る■

バ リ 島 沖 海 戦



カットは猛進するわが駆逐艦群

石橋 孝夫

by Takao Ishibashi

Battle of Lombok Strait, Feb. 1942

戦いはひとつの勢いである。潮の流れのように勢いに乗った時には、多少の不都合は問題にせず相手を圧倒してしまうものである。そして反対に流れに逆らうと、やることなすことすべて裏目に出て、みじめな結果に終るのが常である。

太平洋戦争の緒戦において、日本軍が圧倒的兵力をもってフィリピン、マレー、蘭印を席卷した時、米英蘭豪の4カ国よりなる連合国海軍は、寄せ集めた弱小戦力をもって日本軍に抵抗したが、しょせん潮流に逆らう一本の杭に過ぎなかった。このバリ島沖海戦（米国側呼称はパダン海峡海戦）もこの時期に発生したこのような海戦の一つであった。

1) 発端

東部ジャワ攻略の足掛かりとするためのバリ島攻略は、昭和17年1月22日のマニラ会議で決定され、引き続いて陸海軍の間で作戦協定がなされ、攻略時期として2月18日が予定されていた。参加兵力は陸軍第48師団から抽出する歩兵1個大隊、それに海軍の第1根拠地隊主力と第2水雷戦隊駆逐隊の一部があてられた。さらにこの作戦を最も熱心に主張していた第11航空艦隊が兵力の一部をマカッサルに進出させてバリ島攻略部隊の支援を担当し、また特設水上機母艦讃岐丸が麾下の飛行隊とともにマカ

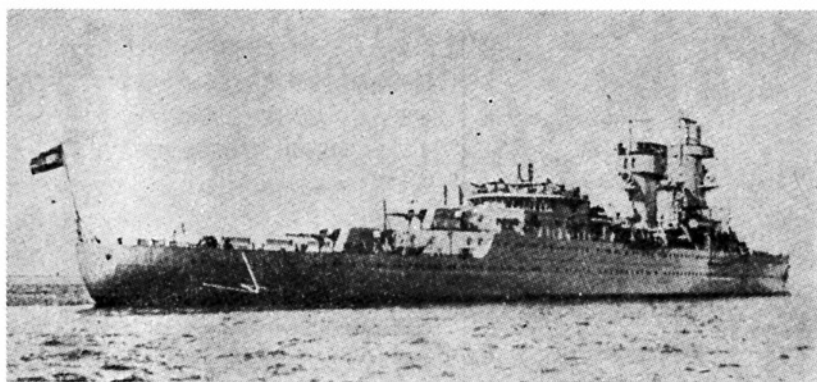
ッサル付近のパラバに進出して攻略部隊の対潜哨戒にあたることとなっていた。

作戦は予定どおり発動され、まず航空部隊による事前航空制圧が実施されたが、マカッサル海峡方面が連日の悪天候のため攻撃はほとんど実施できず、また戦闘機隊の進出も遅れていたため作戦は一日延期されることとなった。

2月18日、攻略部隊は上陸部隊を搭載した笹子丸（9,781重量トン）および相模丸（9,794重量トン）を第8駆逐隊（大潮、朝潮、満潮）が直接護衛してマカッサルを出撃し、途中対潜掃討のため先行していた荒潮と合流して上陸地点に向かった。讃岐丸飛行隊と戦闘機隊の上空警戒のもとに攻略部隊は無事に航行を続け、同夜11時頃上陸地点であるサヌール沖に達し、ただちに泊地に進出して上陸部隊の揚陸を開始した。

翌20日、日の出とともに前日来飛行艇を放って上陸を察知していた連合国側は、B17などの重爆による波状攻撃を船団にかけてきた。このため8時30分頃相模丸は中央部に被弾し、機関の半数が使用不能となり、笹子丸も至近弾で若干の損傷を生じた。その後空襲は小数機により断続的に行なわれ、さらに飛行艇が常に接触を保っていた。

午後4時半頃、泊地沖を哨戒中の大潮は米潜水艦シー



ドールマン少将座乗のオランダ巡洋艦デ・ロイテル De Ruyter

ウルフの雷撃を受けたがこれを回避し、爆雷で制圧した。空襲と潜水艦の攻撃を避けるために、笹子丸は舟艇の揚収を残したまま、両船とも午後5時半頃泊地を出てロンボク海峡北方に向かい、損傷を受けた相模丸は片舷航行で荒潮と満潮の護衛の下にマカッサルに向かった。一方笹子丸は、舟艇揚収のため反転し、大潮、朝潮とともに再びサヌールに向かって午後9時半に入泊し、ただちに揚収作業を始め、同11時50分頃作業を終了してマカッサルに帰投せんとしていた。

バリ島攻略にあたり、日本軍は敵情に関して、バリ島は敵航空基地および艦隊基地に近いと、ともに日本軍の航空攻撃で多大の損害を受けているとはいえ、相当の航空反撃および小艦艇による泊地急襲の可能性は十分あり、警戒を要するという判断をしていた。特に日本側が連合国主力艦艇出現の可能性が少なくないと判断したのは、先の(2月4日)ジャワ沖海戦で、海軍航空隊の攻撃により連合国主力艦隊に多大の損害を与えた(ジャバ型1隻、デ・ロイテルを撃沈、ジャバ型1隻、マーブルベッド型1隻をおのおの中破)と断定したためであったと思

われ、事実これはかなり甘い判断であったことが後に知るところとなった。

当時連合国側は、バリ島攻略に関しては10日ほど前より予報を得ており、かつ有力な艦隊(先のジャワ沖海戦ではヒューストンとマーブルベッドが中破したのみで沈没艦はなかった)を有していたにもかかわらず、日本軍のバリ島上陸前に攻撃をかけるだけの

艦艇を集結することができなかった。

2月17日、日本軍の上陸が間近に迫ったとの情報を得た連合国攻撃部隊指揮官ドールマン海軍少将(蘭)は、当時麾下有力艦艇の一部(英巡洋艦エクゼター、豪巡洋艦パース、米巡洋艦ヒューストンなど)が船団護送任務のため派遣中であり、ほかの艦艇もチラチャップ、スラバヤなどに分散していたため、艦艇の集結を待たずに各梯隊となってバリ島の日本軍泊地を襲うことを決定した。

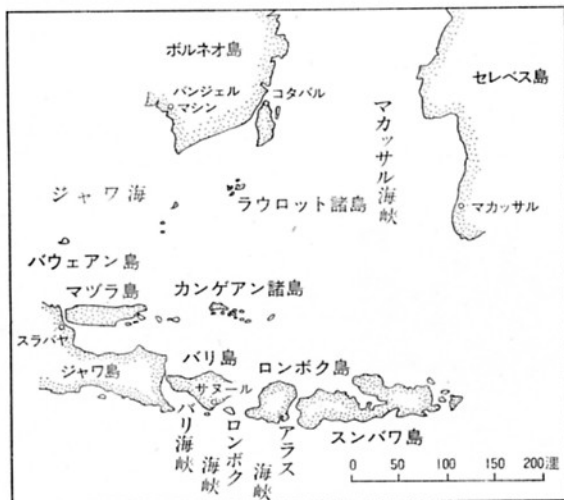
計画ではチラチャップにある蘭巡洋艦デ・ロイテル、同ジャバ、米蘭駆逐艦をドールマン少将が率いて第1陣として泊地に突入、砲雷撃攻撃を敢行した後ロンボク海峡を経て帰投、第2陣としては蘭巡洋艦トロンプと米駆逐艦4隻がスラバヤで合同して第1陣の2、3時間後に突入して、残存日本艦艇および船団を討ちとり、最後に締めくくりにしてバリ海峡基地の蘭魚雷艇隊が第2陣の1時間後に海峡に突入して止めを刺すものとされていた。

2月18日午後10時、ドールマン少将の第1陣は蘭巡洋艦デ・ロイテル、ジャバ以下蘭駆逐艦ビート・ハイン、米駆逐艦ジョン D. フォード、ポーブを率いてチラチャップを出撃した。同行するはずの蘭駆逐艦ホルテノールは出港の際に擱座して戦列を離れた。

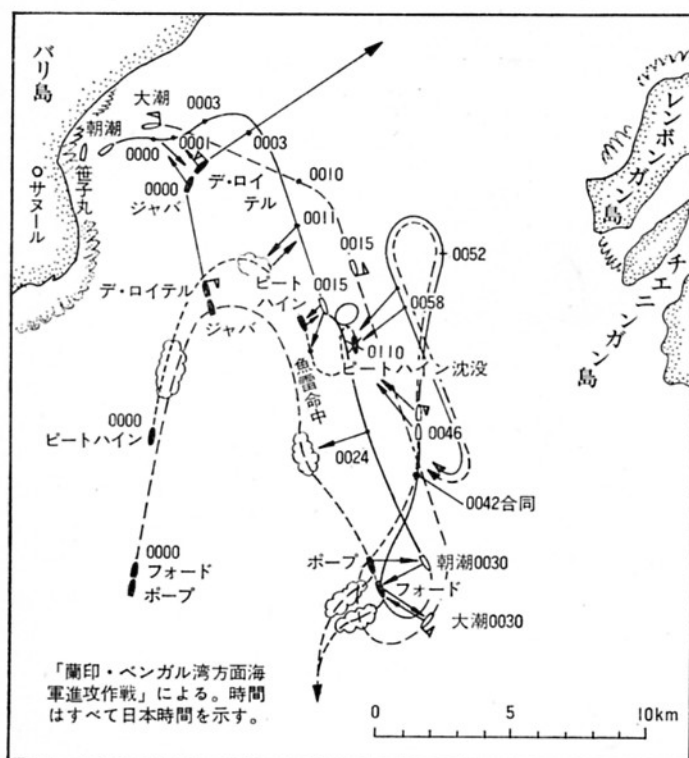
2月19日夜半、ドールマン部隊は戦列配置につき、デ・ロイテルとジャバが縦隊となり、後方に駆逐艦を率いて日本軍の泊地に接近しつつあった。当夜は曇天の暗夜で、視界は8,000メートルを切っていた。

2) 第1次戦闘

午後11時53分、正に泊地より航行を起こそうとしていた朝潮は南方より接近する艦影を発見し、これをジャバ型巡洋艦2隻と識別した。午前0時ちょうど、日本側より若干遅れて朝潮を発見したジャバが距離2,000メートルで発砲、朝潮も星弾と探照灯で照射、応戦したが、航行を起こしたばかりで行き足がつかず、砲戦2分にして敵を見失ってしまった。あっという間のすれ違いのため双方ともに損傷はなく、わずかに朝潮の探照灯に弾片が



バリ島周辺図



バリ島沖海戦第1次戦闘態勢図（2月20日0000～0110）

当たっただけで、デ・ロイテルとジャバはそのまま高速で海峡を北上離脱して行った。敵巡洋艦が南方に反転したと判断した朝潮は、速力を増して南方に向かった。僚艦の大潮は朝潮の前方2、3キロにあったが、朝潮の発砲をみて戦闘に加わるべく航行を起こしたが間に合わなかった。

主力より約5,500メートル後方にあった連合国は巡洋艦の発砲を見て、先頭のビート・ハインはジグザグ航行をしながら余り定かでない目標めがけて発砲、フォードは魚雷1本を発射したが、もちろん何の効果もなかった。さらにビート・ハインは意図不明の煙幕を展開し、後続の2隻の米駆逐艦はこれを避けるため減速した際、先頭艦との距離が開いてしまった。

0時5分、南方煙幕の端に現われたビート・ハインを大潮が発見、南下して来た。ビート・ハインも前方に大潮を発見して右に回頭し、このため先に南下した朝潮の右を同航する結果となり、0時10分頃より1,500メートルの近距離で猛烈な砲戦を交えた。朝潮の優勢な火力に圧

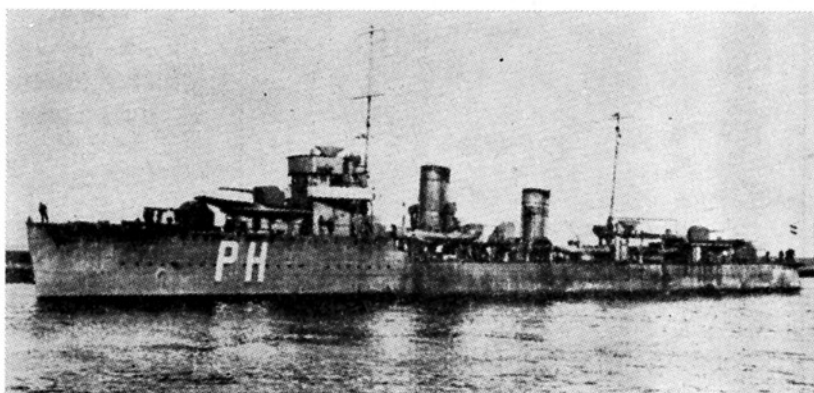
倒されたうえ、さらに朝潮の魚雷1本を喫したビート・ハインは機関が停止し炎上した。朝潮はこれを撃沈したものと認めて、左方より追っていた大潮とともに、先のビート・ハインとの戦闘中に発見した敵駆逐艦2隻を求めて南下を続けた。この2隻、フォードとポーはビート・ハインに追いつくべく煙幕を突破して右に旋回、ビート・ハインの非戦闘側に出て、ビート・ハインの落伍後、朝潮、大潮と同航して0時24～30分にわたって砲火を交えた（この前にフォードとポーは笠子丸を発見、これを雷撃して魚雷1本を命中させたと主張しているが、その事実は日本側では認められていない）。米駆逐艦はいずれも第1次大戦中の計画になる4本煙突の旧型艦で、新鋭の朝潮、大潮に抗すべくもなく、煙幕を展開して南方に脱出したが、短時間の乱戦のため互いに損傷はなかった。

米駆逐艦を煙幕で見失った朝潮、大潮は反転北上中、0時45分先に攻撃した炎上漂泊中のビート・ハインを発見、新たな目標と誤認してこれを砲撃し、再び大火災を生じさせた。両艦は再度反転南下して、まだ沈まずにいた

ビート・ハインを三度新目標と誤認して攻撃し、午前1時10分頃ビート・ハインがついに沈没したためこれも撃沈したものと判定した。

かくして約1時間にわたった最初の戦闘は終了した。

朝潮と大潮は1時40分頃サマール沖に戻り、海峡中央部を東西にわたって哨戒を続けるとともに、第8駆逐隊司令は「敵ジャバ型2隻はロンボク海峡を北方に逃走、後に残れる駆逐艦3隻は2隻を撃沈、1隻大破、われ被害なし、0140」と報じた。もちろん実際に沈めたのはビート・ハイン1隻のみであったことはいうまでもない。



バリ島沖海戦で両軍をとおして唯一の沈没艦となったオランダ駆逐艦ビート・ハイン Piet Hein

ロンボク海峡の北方80哩にあって支援任務に就いていた長良と第21駆逐隊（初春を欠く）は、この時すでに海戦の第一報に接して全速で南下中であり、またさらに先に相模丸を護衛してマカッサルに向かった第8駆逐隊第2小隊（荒潮、満潮）も第1根拠地隊司令官より第1小隊に合同するよう命ぜられていた。

このため荒潮と満潮は午前1時45分相模丸を分離し、全速で反転南下しつつあった。

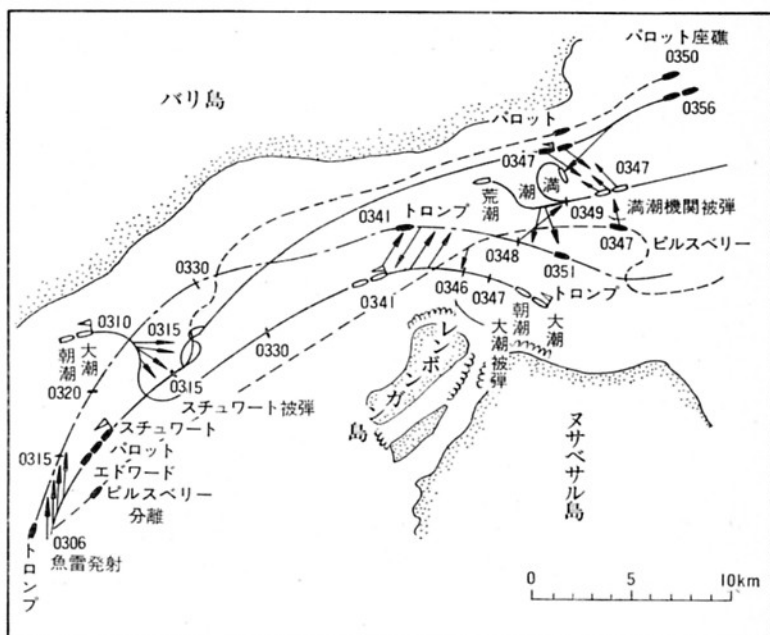
連合部隊の第2陣は J. B. デメーステル海軍中佐が軽巡トロンブ（蘭）に座乗、T. H. ビンフォード海軍中佐指揮下の米第58駆逐隊、スチュワート、パロット、J. D. エドワーズ、ビルスベリーの4隻を率いてスラバヤを出撃、第1陣の後方より海峡に突入して来た。

3) 第2次戦闘

第2陣がターフェル岬に近付いた時、見張員は前方遠くに砲火のひらめきと探照灯の光芒を発見した。いうまでもなくドールマン少将の第1陣が日本軍と交戦中に違いなかった。ビンフォード海軍中佐は第1陣の第59駆逐隊司令パーカー海軍中佐と無線連絡を試みたが何ら得るところはなく、第1陣に何が起きたのかはまったく分からなかった。泊地に近付く前に艦隊は隊形を改め、米駆逐艦はスチュワートを先頭に単縦陣となって先頭集団を成し、その後方約8,000メートルに蘭巡洋艦トロンブが続いていた。これは先頭の駆逐艦隊が魚雷による先制攻撃を実施した後、トロンブの優勢な砲力を用いて砲撃を行なうという作戦であった。

午前3時6分頃、速力25ノットで泊地に迫った米駆逐艦はぼんやりと目標に対してスチュワート、パロットがおのおの6本、ビルスベリーが3本の魚雷を発射したが、もちろん何の効果もなかった。3時10分、哨戒中の朝潮と大潮は再び南方より高速で近付く艦影を発見、巡洋艦2隻、駆逐艦1隻と判定してただちに接敵行動に入り、3時15分、距離3,200メートルほどで、先の魚雷発射の際隊列を離れたビルスベリーを除く3艦と砲雷撃を約8分間にわたって交えた。

この戦闘でスチュワートとエドワーズはおのおの朝潮、大潮に対して魚雷を発射したが命中せず、また日本側の魚雷も効果がなかった。ただこれまでの戦闘と同様、日本側の砲火は非常に優勢で、スチュワートは舵取機械室



バリ島沖海戦第2次および第3次戦闘態勢図（2月20日0306～0351）

に命中弾を受け、さらに跳弾により乗員1名が戦死、副長が重傷を負った。スチュワートの被弾で米駆逐艦の隊形は乱れ、そのうえパロットは舵の故障で隊列を離れ、単独で北上して行った。

バリ島の山陰に敵を見失った朝潮と大潮は反転、東進して行った。この時後詰めとして後方より続航していたトロンブはほぼ大潮、朝潮の左を同航する形になったが、日本側からは島陰に入って発見できず、しばらく同航が続いた。同3時41分、レンボンガン島北西沖で大潮と朝潮はこのトロンブを左前方3,200メートルに同航する形で発見し、正確にトロンブ型と識別して、ただちに左同航砲雷戦を開始した。トロンブも探照灯を点灯してただちに応戦、日本側の魚雷はここでも命中しなかったが、砲撃はかなり効果的で、トロンブの探照灯と射撃指揮装置が破壊され、命中弾は約10発を数えたが、致命的な打撃を与えるまでには至らなかった。一方、この砲戦で大潮も後部2番砲塔給薬室に1発受け、若干の死傷者を生じた。

両者の交戦は3時50分過ぎまで続き、その後互いに接触を失って砲撃を中止したが、この交戦中3時50分頃、トロンブは左舷より突然砲撃を受け、ここに新手の日本部隊の出現を知った。

4) 第3次戦闘

トロンブの左舷に命中弾を与えたのは、相模丸と分離して全速で南下してきた第8駆逐隊第2小隊の荒潮、満潮の2隻であった。この2隻は3時40分頃バダセ海峡東

口に達し、前方に砲火の閃光を認め、戦闘に加わるべく満潮、荒潮の順で西進してきた。3時45分、第2小隊は左前方の砲火（トロンブと第1小隊の交戦）とは別に、右前方バリ島の陰から駆逐艦2隻が反航してくるのを発見、3時47分、双方ともに距離約3,500メートルで砲戦を開始した。この2隻は先に第1小隊と交戦後北上してきた米駆逐艦エドワーズ、スチュワートで、さらに非戦闘側をバロットが同航していたが、同艦は砲撃には加わらなかった。

第2小隊が米駆逐艦2隻と交戦を開始したのとほぼ同時に、左舷至近距離に突然駆逐艦1隻が現われて、砲火を浴びてきた。これは先に隊列を離れたビルスベリーで、第2小隊はちょうど米駆逐艦にはさまれる形で交戦するはめになった。この交戦で先頭の満潮は、探照灯を右舷に指向していたため、左舷からビルスベリーに狙い打ちされた。上構には多数の命中弾を受け、また機関室も被弾したため航行不能となった。同艦は右に回頭漂泊状態のまま応急処置に努め、それと同時に米駆逐艦への砲撃を続行し、若干の命中弾を得たが、砲煙に姿を見失ってしまった。後続の荒潮はそのまま直進したが3時50分、左舷に巡洋艦1隻が反航してくるのを発見し、2、3斉射を浴びせた。これは第1小隊と交戦中のトロンブで、左舷探照灯を破壊したのはこの荒潮の砲火であったが、反航戦のためたちまち互いに姿を見失い、戦闘は短時間のうちに終了した。これを最後にすべての戦闘は終了した。

5) 戦闘のその後

もちろん戦闘が終ったとはいっても、連合国側はこの後さらに第3陣として魚雷艇隊の海峽突入がひかえていたが、結局出動した5隻の魚雷艇はそのまま何も発見できず、海峽を通過したに過ぎなかった。

第2陣の米駆逐艦バロットは戦闘離脱直後、バリ島沖の浅瀬に擱座したが、数分後に自力で離脱し、他艦を追って北上、結局夜明け前までに連合国側艦艇はすべて戦場より去っていた。

戦いの終わったサヌール沖には沈没したビート・ハインの乗員が海面を漂流し、そのうち士官1名、下士官兵9名が第8駆逐隊の各艦に収容された。尋問の結果、敵第1

陣兵力の内容が明らかとなった。ビート・ハインの生存者はほかに艦長以下33名が付近を航行中の捕鯨船に救助され、後に米駆逐艦バロットに移乗したといわれている。

午前6時、急行中であった長良と第21駆逐隊（子日、若葉、初霜）がようやく現場に到着したが、もちろん戦闘には間に合わず、とりあえず長良と初霜をロンボク海峡北口に配置して敵襲に備えさせ、残りの各艦と第8駆逐隊の各艦を満潮の救援に向かわせた。

先の戦闘で被弾して航行不能となった満潮は、その後漂泊しながら応急修理に努めていたが、幸い水線下への被弾はなく、浸水の恐れはなかった。しかし上構への集中被弾は多くの人的被害を生じ、機関長以下64名が戦死および負傷し、ほぼ大破状態にあった。

午前10時、部隊は引揚げを開始し、満潮は荒潮に曳航されて8ノットで航行を開始したが、間もなくB17が来襲、回避運動中に曳索が切断、満潮と大潮が至近弾で若干の浸水被害を受けた。このため大潮は10ノット以上の速力発揮が不能になり、第8駆逐隊司令は乗艦を朝潮に移し、若葉に護衛させて大潮を先行させた。連合国側爆撃機は午後にも来襲したが、それ以上の被害はなく、各艦とも21～22日に無事マカッサルに帰投、相模丸、笹子丸もともに無事であった。

他方、戦闘に参加した連合国艦艇のうち、トロンブとスチュワートの2隻は緊急修理を必要としていた。スラバヤの浮ドックに入渠したスチュワートは、艦の保持がいかげんであったため、浮ドックが浮揚した際に左に横転してしまい、結局ドックもろとも放棄されてしまった。ただしこの米駆逐艦の生涯はこれで終わったわけではなく、後に日本軍に引き揚げられ、日本海軍の哨戒艇として米潜水艦を撃沈するという数奇な運命をたどることになるのである。

トロンブもこの損傷のお陰で後のスラバヤ、パタビア海戦に参加できず、命拾いをしたのであった。

6) 勝因と敗因と

勝敗はおのずと明らかである。連合国側は巡洋艦3隻、駆逐艦7隻という有力な兵力を投入しながら、わずか2隻（後に4隻）の駆逐艦に護衛された輸送船1隻に一指も染めることなく、しかも2隻の日本駆逐艦に翻弄されて、味方駆逐艦1隻を失うといった結果は、まったくみじめなものであった。

連合国側の敗因はいろいろ考えられる。大局からみれば、水上艦艇による夜襲をかける時期が遅過ぎたことがこの作戦の価値を非常に少なくしており、たとえば夜在泊した笹子丸と駆逐艦2隻を撃滅することに成功したとしても、バリ島上陸作戦にはほとんど影響するところはなく、貴重な連合国側の戦力を危険にさらす価値があっ

▶海人社販売特選図書◀

造船会編 造船官の記録

旧海軍造船官の回想記を一堂に収めた興味津々たる記録で、戦前、戦中の艦艇建造にまつわるさまざまなエピソードが、ふんだんに盛り込まれており、艦船ファン必読の書といえる。B6判 676頁。

1,200円 千200円

たかどうかは疑問であろう。もちろん、このような日本軍上陸部隊の状況を知りえなかったとしても、前日来航空機による接触を保っていたことを考えれば、明らかに敵情通報機能に欠陥があったと考えざるをえない。そしてこれは結局、当時の連合国側兵力が米英蘭豪4カ国の混成兵力で、しかもそのため指揮系統が乱脈になり、統制が困難になっていたことに起因しているものであろう。

もちろん細かい点では、時間的に無理があったとしても、兵力を分散したこと、各部隊間の連絡を欠いていたこと、攻撃の主体を砲力におき過ぎ、しかも砲力の主力を成す巡洋艦が簡単に戦場を離脱し過ぎたこと、隊列が離れ過ぎたことなどいろいろあげることができよう。しかも当夜が曇天の暗夜といった悪条件も重なって、完全な夜間の乱戦となったため、夜戦に関しては一日の長がある日本海軍に翻弄されてしまったことは残念ながら明白な事実であった。しかし連合国部隊もよく善戦し、大破した満潮以外にも、大潮と朝潮で若干の戦死者を生じており、決して無傷ではなかった。

一方、日本側は揚陸作業を完全に終えた空の輸送船1隻しかなかったことや、護衛任務にあった2隻の駆逐艦は日頃よりチームワークのとれた同駆逐隊の艦であったこともあって、完全に戦闘のイニシアチブをとって連合国側をひっかけ回し、その企図を阻止したのはまったく見事であったが、ビート・ハインを沈めた以外に相手に与えた損害は、トロンプが中破、スチュワートが小破したにとどまり、全般に血気にはやって右往左往した感がないでもない。

特に気になるのは魚雷の命中率が非常に低かったことで、大潮、朝潮は3回にわたって3,000メートル前後の至近距離で約10隻の艦と交戦する機会があったにもかかわらず、命中したのはビート・ハインに当たった1本のみであった。両艦の消耗魚雷数に関する資料がないため明らかではないが、交戦の回数から考えれば大半を発射したと考えられ、特にビート・ハインを3度にわたって、おのおの新たな目標と誤認して攻撃したことだけをとっても、後のガダルカナルの夜戦で見せたほどの腕のさえがみられなかったことは残念であり、結局魚雷の命中率の悪さが撃沈艦を1隻にとどめた最大の要因といえよう。ちなみに日本側駆逐艦が消耗した砲弾は、大潮217発、約36斉射、朝潮310発、約52斉射、満潮62発、約10斉射、荒潮73発、約12斉射と記録されている。

大本営はバリ島沖海戦で敵駆逐艦2隻撃沈、1隻大破と発表し、特に意識的な水増し戦果は報じていなかったが、第8駆逐隊が海戦後判定した戦果はもう少し過大なものであった。

最後に本海戦に参加した両軍艦艇について簡単に触れてみよう。

まず日本側の4隻の駆逐艦はいずれも昭和12~14年(1937~39年)に完成した朝潮型に属する艦で、建造時にタービン、旋回性能に関して問題を生じて若干の改正を必要としたが、次いで建造された陽炎型とともに開戦時にあっては最新鋭艦の一つで、艦隊型駆逐艦としては世界第一級の性能を誇っていた。基準排水量1,961トン、速力35ノット、12.7センチ連装砲3基、61センチ4連装魚雷発射管2基(各次発装填魚雷を有す)と、特に兵装の強さは抜群で、当時蘭印方面にあった米英蘭などの旧式駆逐艦と比べるとまず圧倒的強さを有しており、駆逐艦同志の戦闘ではまずひけをとるものではなかった。

連合国側の巡洋艦はすべてオランダ海軍のものであった。そのうち最も旧式なジャバは1925年に完成、第1次大戦末期の独輕巡に範を取った、排水量6,670トン、15センチ単装砲10門、速力31ノットとほぼ日本海軍の5,500トン型に準ずるもので、1935年に若干の近代化改装を実施していた(同型にスマトラがある)。

デ・ロイテルは1936年に完成した新鋭輕巡で、就役以来蘭印艦隊の旗艦を務めていた最有力艦であった。基準排水量6,442トン、15センチ砲連装3基、単装1基、40ミリ連装機銃5基、カタパルト1基、水上機2機を搭載、速力32ノットとこの程度の輕巡としてはまずまずの艦であった。特に外観の特異性、すなわち直立した高い塔状前橋と煤煙よけのスクリーンを付けた煙突は、戦艦に

古 書 買 受

●軍艦・飛行機

●陸海空関係一般

その他一般古書

不用の古書がありましたら
ご一報下さい。

書名、著者名、発行所など
をお知らせ下されば、折返
しご返事申し上げます。

文 華 堂 書 店

東京都千代田区神保町2の5
電話(262)0422 振替 東京 80214

も似た威容を有していたことでよく知られていた。

トロンプは1938年に竣工した軽巡であるが、基準排水量は3,787トンと非常に小型で、特色のある艦であった。元来は2,500トンの嚮導駆逐艦として計画されたことと伝えられているが、若干大型化して軽巡として完成したもので、当時非常に大型化してしまった一般の軽巡と駆逐艦の中間的存在で、超駆逐艦の一種といえた。砲塔式の15センチ連装砲3基、40ミリ連装機銃4基、53.3センチ魚雷発射管3連装2基を装備し、さらに水上機1機の搭載も可能であった。したがってデ・ロイテルに比べてわずかに片舷砲力15センチ砲1門が劣るだけで、駆逐艦程度の艦を相手とした場合は十分な砲力を持っていた。ほかに同型艦1隻があり、ともに大戦を生き残り戦後しばらく存在していた。

オランダ駆逐艦ビート・ハインは1927～30年に合計8隻建造されたファン・ゲント型の1隻で、基準排水量1,310トン、12センチ砲4門、7.6センチ高角砲2門、53.3センチ魚雷発射管3連装2基、速力34ノット、当時の英駆逐艦に倣った設計で、開戦時にはかなり旧式化していた。ほかの同型も大戦中にすべて戦没している。

戦闘に参加した合計6隻の米駆逐艦は前にも触れたように、すべて前大戦中の計画になり大量建造で有名な水平甲板4本煙突型の艦で、各艦で多少異なるが、基準排水量1,190トン、10センチ単装砲4門、7.6センチ高角砲1門、53.3センチ魚雷発射管3連装4基、速力36ノットが標準であった。マスプロ艦だけに老朽化も早く、第一線での任務にかなり無理があったが、米アジア艦隊の駆逐艦はすべてこの型で占められていた。

* * *

バリ島沖海戦に関する文献として最も権威あるものは、防衛庁戦史室の手になる戦史叢書「蘭印、ベンガル湾方面海軍進攻作戦」中の本海戦に関する記述と思われ、本稿もこれを全面的に参照したものである。連合軍側の著述としては有名なモリソンの米海軍作戦史中、邦訳されて広く知られている「太平洋の旭日」下巻の中に本海戦に関するかなり詳しい記述があるが、先の戦史叢書中にも述べてあるように、かなりの部分にわたって日本側の調査と食い違っており、時期的にも戦後間もなくの著述のため信頼性の乏しい面はかなりあると考えられる。したがって同書に見られる、第1次戦闘後における日本駆逐艦の同志討ち、笹子丸に対する魚雷命中などはまったく誤認と思われ、日本駆逐艦の戦傷者数に関しても先の戦史叢書の記述によったものであることをお断りしておく。全般に日本側を含めて海戦の資料に乏しく、特に後の戦闘でほとんどの艦艇が失われたため、オランダ側資料がまったく見られず、戦闘の詳細に関してはまったく知られていないのは残念である。

「世界の艦船」バックナンバー

<特に古い号を集めている方はお早く御注文下さい>

61年 5月号	品 切	66年 5月号	220円	〒35
〃 6月号	〃	〃 6月号	220	35
〃 7月号	〃	〃 7月号	260	40
〃 8月号	〃	〃 8月号	220	35
〃 9月号	〃	〃 9月号	品 切	
〃 10月号	150円	〃 10月号	220	35
〃 11月号	品 切	〃 11月号	250	40
〃 12月号	〃	〃 12月号	260	40
62年 1月号	〃	67年 1月号	300	40
〃 2月号	〃	〃 2月号	220	35
〃 3月号	〃	〃 3月号	250	40
〃 4月号	〃	〃 4月号	230	35
〃 5月号	〃	〃 5月号	230	35
〃 6月号	〃	〃 6月号	230	35
〃 7月号	〃	〃 7月号	230	35
〃 8月号	〃	〃 8月号	230	35
〃 9月号	180	〃 9月号	270	40
〃 10月号	品 切	〃 10月号	230	35
〃 11月号	180	〃 11月号	230	35
〃 12月号	180	〃 12月号	230	35
63年 1月号	品 切	68年 1月号	品 切	
〃 2月号	〃	〃 2月号	230	35
〃 3月号	〃	〃 3月号	280	35
〃 4月号	〃	〃 4月号	280	35
〃 5月号	180	〃 5月号	260	35
〃 6月号	180	〃 6月号	280	35
〃 7月号	180	〃 7月号	260	35
〃 8月号	180	〃 8月号	260	35
〃 9月号	190	〃 9月号	280	35
〃 10月号	190	〃 10月号	品 切	
〃 11月号	190	〃 11月号	〃	
〃 12月号	220	〃 12月号	280	35
64年 1月号	品 切	69年 1月号	品 切	
〃 2月号	190	〃 2月号	260	35
〃 3月号	190	〃 3月号	280	35
〃 4月号	220	〃 4月号	280	35
〃 5月号	190	〃 5月号	260	35
〃 6月号	190	〃 6月号	300	40
〃 7月号	220	〃 7月号	260	35
〃 8月号	190	〃 8月号	260	35
〃 9月号	190	〃 9月号	260	35
〃 10月号	190	〃 10月号	280	35
〃 11月号	190	〃 11月号	280	35
〃 12月号	200	〃 12月号	260	35
65年 1月号	290	70年 1月号	380	40
〃 2月号	200	〃 2月号	300	40
〃 3月号	200	〃 3月号	280	35
〃 4月号	200	〃 4月号	280	35
〃 5月号	200	〃 5月号	350	40
〃 6月号	200	〃 6月号	300	40
〃 7月号	200	〃 7月号	300	40
〃 8月号	200	〃 8月号	280	35
〃 9月号	200	〃 9月号	330	40
〃 10月号	220	〃 10月号	280	35
〃 11月号	220	〃 11月号	280	35
〃 12月号	220	〃 12月号	360	40
66年 1月号	290	71年 1月号	380	40
〃 2月号	220	〃 2月号	280	35
〃 3月号	220	〃 3月号	280	35
〃 4月号	220	〃 4月号	280	35